

学 位 論 文 要 旨

氏 名 萩野 奈幹

題 目 道徳教育における問題解決学習の在り方に関する研究
ーデューイ教育哲学を基底にしてー

道徳授業が平成27年に「特別の教科 道徳」として新しく教育課程に位置づけられた際に、教材の登場人物の心情理解に偏った学習から、道徳的問題を主体的に考え協働的に議論する「問題解決的な学習」へと質的転換をすることが求められた。しかしながら、学校の教室では道徳科に問題解決的な学習が導入された経緯や趣旨が十分理解されておらず、従来のような登場人物の心情理解に自我関与を加えた程度の授業改善に止まっている傾向にある。

そこで、本論文の目的は、ジョン・デューイの教育哲学を基底にして道徳教育における問題解決学習の指導法と評価の在り方を解明すると共に、学校の教育活動全体で行う道徳教育の在り方を明らかにすることにある。

まず、デューイの教育哲学に基づく道徳教育の在り方について検討した。具体的には、デューイの経験論や思考論によって導かれる道徳教育論に基づく問題解決学習の考え方と特質を明らかにし、道徳科における問題解決的な学習の指導方法を理論レベルと実践レベルから検討した。そこから、子どもたちが連続した経験の中で反省的思考を働かせ、相互の自由なコミュニケーションを介して、経験の意味を増し、道徳的成長を遂げるという道徳科の問題解決学習の在り方を明らかにした。子どもたちが実際の道徳的諸問題に真摯に向き合い、反省的思考によって行動の目的や見通しをもって解決策を主体的に考え判断する学習について検討した。また、デューイ教育哲学の反省的思考に基づく道徳教育論は、子どもたちが他者とコミュニケーションを介して、豊かな対話的経験を共有し、社会的共感を広げながらよりよい民主主義社会を築き上げるために協働して探究する学習でもあることも示した。

次に、デューイ教育哲学に基づく道徳授業を参考にして、道徳科の問題解決学習の特徴と指導の在り方を提示した。デューイの民主主義論と道徳教育を関連づけ、相互に関心を共有し、他者と協働しながら問題解決に取り組み、自由な相互作用によって自己と社会を調和的な関係にしていくことを目指した。また、デューイ教育哲学に基づく問題解決学習では、道徳的問題状況を分析すると共に、自己と他者や社会との関係性において、何が問題になっているかを感じ、その解決に向けて自分たちに何ができるかを反省的に思考し、その問題に関係する社会的弱者に共感したり配慮したりすることが重要であることを指摘した。また、知性と感情を補完的に働かせることが、より多くの人々に配慮した道徳的理想や、よい判断を伴う道徳の実践意欲や態度に繋がる。こうした学習では、単に子どもの学習経験における能動性だけでなく受動性をバランスよく取り入れた授業構成やアプローチにする必要があることを指摘した。

上述の道徳科の問題解決学習に対応した評価の在り方を明らかにした。デューイの教育哲学が

ら影響を受けた「真正の評価」論を理論的根拠とするポートフォリオ評価に注目した。OPPA(One Page Portfolio Assessment) で用いるOPPシートと呼ばれる一枚の用紙を蓄積したポートフォリオを活かし学びを振り返る検討会を基に検討した。デューイの考える反省的思考や経験学習の考え方は、道徳的な成長を認め励ます個人内評価や、ポートフォリオを生かした民主的な教室空間で行われる省察的評価活動と関連していることを指摘した。こうした評価活動は、子ども自身が大切にしていきたいことを振り返り、他者との対話を通して、相互作用される状況の中で生きる意味を見出す省察的な学びのプロセスである。

さらに、デューイの構想する全面主義の道徳教育の一環として、道徳教育と特別活動を関連付けて検討した。具体的には、デューイの教育哲学から影響を受けたピースフルスクールプログラム」(以下、PSP)を取り上げて授業実践を考察した。PSPの教育実践は、問題解決学習を通して、学びと行為を繋ぎ、民主的な道徳教育を可能する。ここでは、目的を持った他者との協働を重視した相互学習を意図的に指導過程に組み込み、子どもの活動から生じた認識を教師の言葉がけや対話によって促し、子どもの新たな認識と道徳的実践の質を高めることができる。また、協働的に学び、能動的に知を構築できる教室環境を整え、互いを尊重するピースフルな文化形成をもたらす学習過程や学習環境を創ることで、子どもの情意を豊かにし、他者や共同体のために自らの責任において他者の声を大切にし、民主的な道徳教育に向かう学びを可能にする。

また、デューイの構想する全面主義教育の別展開として、道徳教育と芸術教育(音楽科)の関連性について、プロジェクト・メソッド(課題解決法)を介して検討した。具体的には、デューイ教育哲学から影響を受けたマーセルの道徳教育を取り上げ、音楽による感情経験を重視した人間形成の在り方を検討した。そこから道徳科と音楽科の関連授業を支える核となる考え方として、社会的自己表現と達成感に至る感情経験を重視し、創造的な自己表現から生じた感情の存在に喜びと価値を生み出す機会が大事であることを明らかにした。こうした教育は、子どもの感受性を育み、そこでの感情を道徳的諸価値に照らして多角的に考え、価値を創造する能動的な学びとなり、人間の感情と美しいものに対する尊さを生みだし達成感をもたらす。

今後の課題としては、民主主義社会を創造する道徳科授業に生かす教材を開発すること、子どもの成長を促す形成的評価の在り方について探究すること、芸術論における美的経験による民主主義教育について構想することを提示した。